

舟運観光と都市再生

夏、シンボルイベント「水都大阪2009」開幕

NPO 法人 大阪水上安全協会 会長
大阪水上バス株式会社 取締役社長 山田 一信

1. 観光船会社は現在 8 社

現在、大阪市域の河川には観光船会社は 8 社運航しています。当社と同じ大型船を運航しているのがもう 1 社あり、小型船が 2 社、大阪港を中心に運航しているのが 1 社、加えて 2 社の屋形船と水陸両用船が 1 社です。

当社「大阪水上バス」は25年前の昭和58年10月1日、大阪城築城400年祭イベントにあわせて開業いたしました。昨年10月19日に中之島で鉄道新線を開通させた。関西の私鉄、で京都と大阪を結ぶ京阪電鉄の100%子会社です。大阪城や中之島、道頓堀エリアを中心に通称「水の回廊」と呼ばれている市内の河川と、大阪港では海遊館（水族館）のある天保山岸壁での発着をメインにして、観光船の運航をしています。年間約45万人のお客様にご乗船いただいております。



大阪城とアクアライナー



海遊館とサンタマリア

大阪市の宿泊観光ビジターは2,000万人程度ですが、これに例えばイベントや集客施設来場者の当社観光船への平均乗船比率5%を当てはめると100万人となり、8社合わせた乗船客は80万人位ですので、大阪の舟運観光の需要はまだあると言えます。アンケートをとりましても、運航コース、乗船場がわからないという声が多くありましたので、平成19



水の回廊図

年10月、この8社を中心に地元企業、マスコミ、行政機関等の協力で「大阪シティクルーズ推進協議会」を立ち上げ、観光船を「大阪シティクルーズ」というブランドとしてアピールすべく動きだしました。春の造幣局・大川桜の通り抜け、秋の大阪港のイベント等に「大阪シティクルーズ推進協議会」として参加しております。



「大阪シティクルーズ推進協議会」シンボルマーク

2. 本当の舟運観光はこれから

大阪は、古くは難波津（大阪城の北西あたり）という港が開かれ、遣隋使、遣唐使もここを発ち、大陸との交易、交流の拠点となり、人も物も河川を利用して京や奈良の都を目指しました。その後、豊臣秀吉が大阪城の外濠として東横堀川を掘ったのを皮切りに、堀川の開削が進み、江戸時代には中之島を中心に蔵屋敷が建ち天下の台所、難波八百八橋といわれ、30を越える河川、堀川を船が行き交い舟運は大変栄えておりました。明治、大正には近代工業化をめぐり、中之島を中心に川沿いには主要な行政機関、企業が集まり、まだまだ舟運を生かした発展をしていました。しかし、産業構造が陸上輸送中心に変わり、戦後から昭和40年前半にかけて、堀川の

ほとんどが埋められてしまいました。



埋められた堀川

観光艇「水都号」というのが昭和11年から戦時中まで走っており、今はなくなりましたが、中之島公園でも手漕ぎボート場があり、昭和40年代まではカップルのデートのメッカでした。これを見ると「水の都大阪」と言いますが、商業、産業としての舟運は栄えたものの、市民の憩い、遊び、遊覧としての舟運にはあまり目が向いていなかったように思います。

記録にしても、海から川筋へ入る「出船千艘、入船千艘」のような業務、仕事の絵図は多く残っていますが、市民が舟遊びをしている風景は、天神祭ぐらいしか見あたりません。近年、都市再生が国の経済政策となり、大阪は「水の都大阪再生」としてプロジェクトに取り上げられ、残された河川や水辺が注目され、観光船にも光が当たりだしたところです。大阪の舟運観光が活況を呈するのはこれからです。



「出船千艘、入船千艘」絵図

3. 水上・水辺の安全、安心はかなり充実

戦後、それまで観光船は長らく途絶えておりましたが、当社が25年前に開業した折、当時、砂利や物資輸送の産業用船舶をはじめモーターボートの教習船、大学の倶楽部のボート等は頻繁に航行しておりました。そこで100人を超えるお客様を乗せた観光船に事故があれば大変ということで、河川運航の関係

者が集り、事故防止を主目的に昭和61年に「大阪水上安全協会」を立ち上げました。



「大阪水上安全協会」シンボルマーク

現在業務船と観光船が一番錯綜する河川では、先述の「水の回廊」が中心になりますが、当協会では、平成19年に行政のご指導のもとで自主的な航行ルールを作り、告知をしていただきました。また、平成20年にはこの回廊のエリアにおける棧橋が公共、民間あわせて15箇所ありますので、水上・水辺の安全、安心と利便性を図るため、公共船着場の管理を当協会にまかせていただきました。



東横堀川の航行標識

この自主ルールと棧橋の一元管理により回廊エリアでは、船舶の不法係留は99.9%ありませんし、傍若無人な水上バイク、プレジャーボートの不安全航行の抑止には大きく寄与していると思います。

4. 「水都再生」は「陸都再生」から

なぜ、人は観光船に乗るのか。答えは桜の季節にあります。木の下で花見をして、さらに船に乗り花見をする。水上からの景観が素晴らしいからです。3週間ほどですが観光船からの景観はこのときが大阪は世界一だと思います。人はまず景観を求めて観光船に乗ります。パリのセーヌ川、オランダのアムステルダム運河も海の都ベニスも同じで、陸側が素晴らしいから船にも乗ります。食事、エンターテインメント等はその次です。観光船は「水都再生」には欠かせない重要な装置ですが、まず陸側が良くなるといって河川があっても舟運観光は栄えないと思います。



桜とアクアライナー

平成13年に大阪が水都再生プロジェクトに指定されて以来、船着場の整備が急ピッチで進んでいます。平成16年から一部共用開始した道頓堀川「とんぼりリバーウォーク」、昨年3月には八軒家浜船着場、5月には福島港が整備され、現在、大阪市中央市場港が整備中です。このように船着場が増え観光船に乗る人が多くなれば、陸上側の人々も見られることで、今まで以上に川側を意識した建物や装飾等が生まれてくると思います。



とんぼりリバーウォーク



八軒家浜船着場

平成17年からは、川沿いに市民の募金で桜を植える「桜の会、平成の通り抜け」がスタートし、平成19年秋に当社の淀屋橋港では、「ご来光カフェ」と銘打って早朝営業開始前に栈橋から日の出を拝むイベントが実施されており、また昨年夏には、民間のビル側ではレストランが「北浜テラス」という川床で料理の提供を開始しました。夜の水辺の景観につ

いても、平成14年冬から始まりました大阪市役所から中之島公園にかけての光のイルミネーションも6年がたち、段々とエリアが広がって来ております。



ご来光カフェ



北浜テラス



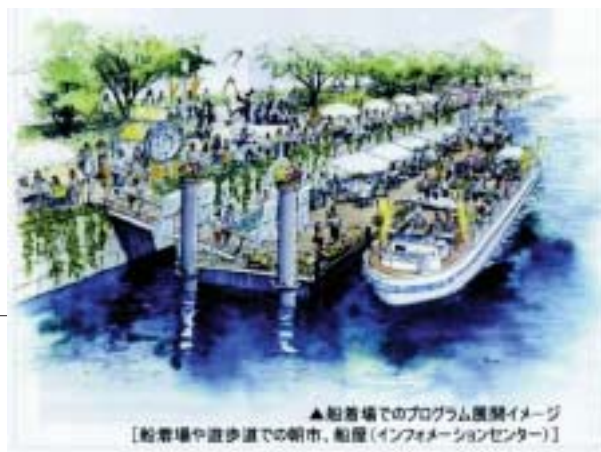
中之島のイルミネーション



いよいよ今年の8月から10月まで、「水の回廊」を中心に水の都の再生を願ったシンボルイベント「水都大阪2009」が実施されます。それに向け先述の八軒家浜の二期が整備中であり、メイン会場となる中之島公園は既に「京阪電鉄・中之島線」の駅が開設され噴水も上る、より親水性を取り入れた公園に様変わりいたします。いよいよ「陸都」大阪変貌の形

がみえてきました。舟運観光の活性化による「水都大阪」再生の夜明けはもう目の前です。これからも当社は安全、安心、環境（景観）、観光の4つをキーワードに、市域の割を河川が占めるという類稀な水の都、大阪の再生の一翼を担い、お客様が「心の豊さ、癒し」を感じて頂ける観光船を運航してまいります。

「水都大阪2009」イメージパース



▲船着場でのプログラム展開イメージ
【船着場や遊歩道での朝市、船屋（インフォメーションセンター）】

【水都大阪2009】概要

テーマ: 川と生きる都市・大阪

方針・アートでまちづくりを促進

- ・市民の視点からの参加
- ・水都大阪のブランドイメージの発信

日程: 8月22日（土）～10月12日（祝・月） 52日間

※入場無料

主催: 水都大阪2009実行委員会（会長 平松大阪市長）

プロデューサー 北川フラム 橋爪紳也

総合アドバイザー 安藤忠雄